

1. はじめに

藤沢市中東部に位置する本校は、児童数 297 名 全学年 2 学級ずつで 14 学級（特別支援学級を含む）、市内で 3 番目に小さい。2021 年は、創立 51 年目にあたる。丘陵地、住宅地、農地があり、比較的自然が多い環境にある。

教職員の年齢構成は、20 代 1 人 30 代 12 人 40 代 6 人 50 代 3 人 60 代 2 人 となっている。

子どもたちは素直で、のんびりしている。支援が必要であったり、いろいろなことが学校任せになってしまう家庭も見受けられるが、学校への理解はある。地域などの協力も得ながら、教職員数が少ない中、きめこまやかな指導や支援を日々心がけている。

校内研究に関しては、継続的な取り組みの中によさがある。学校運営においても、教職員が組織的な動きができること、指導・支援における協力・連携体制のよさを感じている。今回、日頃の教育実践を支えている本校のよさについて、校内研究の取り組みを通して特徴をとらえ、今後の学校運営に生かしたり、課題を改善したりする機会にしたいと考えた。

2. 校内研究の実際

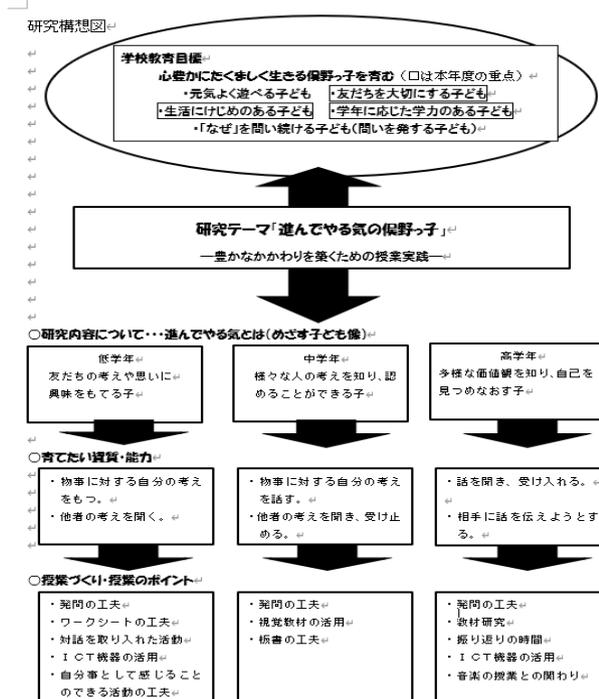
過去の校内研究の記録の中に、「今、目の前にいる児童の力を引き出し、向上させるには、確かな指導力や授業力を身につけさせることが必須である。教職員の本分は授業である。お互いの授業を見合い、授業について研究し指導案を書いて授業を行ってみる。この繰り返しによって授業力は確実に向上する。」と前校長が記している。このことばの通り、今年度も校内研究を継続して行っている。

研究体制は、学年を母体として連学年（低・中・高学年・またの学級）の 4 部会を置き、養護教諭、栄養士、少人数担当、専科も加わる。研究推進委員会は、それぞれ連学年の代表と管理職で構成している。

全員 1 人 1 回授業公開を行う。過去の記録を見ると 2010 年度から 1 人 1 授業を続けている。2015 年度から教科研究「算数科」2018 年度から「外国語」そして、今年度から「特別な教科 道徳」に取り組み始めた。

各学年部会から 1 本ずつ合計 3 本の「柱の授業」（より深く研究し、授業公開を行うもの）を行い、各部会をこえて全体での研究協議を行う。

およそ 10 年の継続の中で、この体制や取り組みが少しずつ進化していると察する。



年間計画	低学年部会	中学年部会	高学年部会	またの級部会
4月	今年度の方針の話し合い（全体会・部会）			
5月	主題・サブテーマ 研究の進め方の確認（全体会・部会）、年間計画の作成（部会）			
6月	俣野の美徳認識・共有	俣野の美徳認識・共有	俣野の美徳認識・共有	俣野の美徳認識・共有
7月	授業内容検討	授業内容検討	F(5-1)	授業内容検討
8月	授業内容検討	授業内容検討	★Y(6-2)	授業内容検討
9月	議題H( )	授業内容検討	M(5-1)	授業内容検討
10月	栄養士N( )	YK(4-2)	T(5-2)	またの学級2組 またの学級1組
11月	授業内容検討	K(3-1)	専科C( )	
12月	K(2-2)			
1月	A(1-1)			
2月	1年間のまとめ			
3月	冊子作り 年間反省			

各月の校内研究部会や研究推進委員会で、授業や指導案の検討、各部会の情報交換や進捗状況・今

後の予定の確認などを行っている。

研究推進委員会での指導案検討への推進委員以外の参加を歓迎している点や柱の授業以外の授業公開でも事前・事後の部会や協議をていねいに行っている点が最近の変化である。

2021. 5. 21

### 校内研究全体会 ②

#### 1. 確認事項

##### 研究の進め方、内容

- めざす子どもの姿、現在の子どもの実態をもとに、道徳の授業につけていきたい力を考え、授業づくりをしていく。
- 研究授業当日だけでなく、それまでの子どもの様子や授業を終えてからの様子までみていき、授業者だけでは見えなかった子どもの姿(変化)を参観者の見とりから気づいていく。
- 研究授業をおこなう前に各部会で指導案検討をする。授業者はできる限り早く、全職員に授業日の連絡と授業の指導案を配布する。授業日が決まり次第、教科別報告、授業後は研究会を開く。
- 柱の授業者の授業づくり、研究授業、授業後の研究協議会はできる限り全員で行っていくようにする。

##### 研究協議、年誌制作等 ※5月28日(金)の研究推進委員会までに部会で話し合う

- 部会について 児童支援担当→中学年部会へ 養護・栄養士→低学年部会へ
- 「めざす子ども像」「育てたい資質・能力」「授業づくり・授業のポイント」を話し合う。
- 柱の授業者、部会の年誌計画を決める。
- 部会で話し合ったものを持ちより、推進委員会で調整する。

#### 2. 指導案の形式

A4、1枚程度が理想でよい

第○学年○組		道徳科学習指導案	
		指導者 ○○ ○○	
1. 日 時	( 月 日 曜日 校時)		
2. 場 所			
3. 主 題 名			
【内容項目】			
4. 主題設定の理由			
(1) 指導案(各部会)「めざす子ども像」にせまる手立て・視点も含めて			
(2) 児童観(異女の姿・児童の実態)			
(3) 教材観			
5. 本時について			
(1) 本時のねらい(または学校の全体と個別の目標を書く。個別目標は別紙として後で回収)			
(2) 本時の視点			
(3) 本時の展開			
	学習活動	指導上の留意点	
導入			
展開			
終 末			
(4) 本時の評価			
6. 授業を終えて(授業後、成果と課題を加える)			

授業後の研究協議では、授業者の自評や参観者の感想に終始せず、限られた時間内ではあるが、授業に端を発する話し合いのやりとりを充実させるように努めている。

上記の内容をふつうに進められること自体が「よさ」であると思っている。昨年度、経験者研修対象者から他校の方々や協議をした時に、本校のような授業研究は、なかなかできることではなく、職員の姿勢や取り組みのよさを指摘されたと報告があった。

教職員は、校内研究の取り組みをどのようにとらえられているのか、知りたいと考えた。

### 3. アンケート調査

教職員を対象に、SWOT分析を参考にした校内研究に関するアンケートを実施した。項目は、校内研究

をどうとらえているのか(他校での経験との比較を含む)、自分が努力していること、本校の校内研究の強みと弱み(課題)、今後の展望などを自由記述するものである。( )の数字は同様の記述の数

#### (1) 教職員のとらえる校内研究と本校の強み

- 研究の流れが作られている。(4)
- 1人1回の公開授業のシステムができあがっている。(2)
- 授業研を行うことで、教職員が学び合える。
- 教科を絞ることで、どの学年もかわり、異学年の違いを知ることができる。
- 毎年1年に1度指導案をつくる機会があることは有意義である。
- 1人1回授業を公開することは授業改善につながりとてもよい。同じ主題や単元の次時の授業を学年で公開することもあり、共同研究の意識が高い。めざす子どもの姿が具体的で、共通理解の上で取り組んでいる。事後検討も活発である。
- 1つの授業について話し合える環境が良い。(2)
- 教科や部会にもつながりがあり、取り組みに一体感がある。
- 研究に対して共通の考えを持ちやすい。
- 全職員がかかわり、授業を見合える環境があること
- 主体的に参加できている。全員が研究と向き合っている感じがする。全員で研究ができている。(4)
- 柱の授業以外にも、多くの人が参観に来ている。養護教諭や栄養士さんも見に来ていて驚いた。(2)
- 教科研にしっかりと取り組んでいる。(5)
- 学年・島(2学年)・部会ごとにもつながり(目標や課題など)がある。(2)
- クラス数が少ないので、話がまとまりやすい。(2)
- 指導案の内容を柔軟に変更して取り組めるのは研究がしやすい。
- 指導案検討や反省振り返りの時間が充実している。
- 経験豊富な教員集団なので、教材や指導案について多様な意見がもらえる。
- 1～6年の縦の繋がりが見える授業づくり
- 個人研究にならないこと
- 普通の授業を考える上でも研究に向けて意識するので、何も無い時よりもアイデアを考えるきっかけになっている。
- チームワークが良い。

## (2)課題

- ・柱の授業をみんなで見れるシステム（もっと見に行きやすく。）(5)
- ・参観の時間確保。参観するために、授業を抜けなければならない。クラスが手薄になる。
- ・職員が少ないので、検討や話し合いでなかなか答えが見つからなかったり、逆に完結させてしまい、話し合いに幅がない時もあると感じる。
- ・クラス数が少ないので、試す機会が少ない。
- ・学年の系統性を部会ごとでやっているが、おさえたものを共通理解（認識）できたらよいと思う。
- ・これまで研究発表などのある年に全員授業をしてお互い見合うなどしたが、普段の校内研で毎年これをするのは勉強になるが、少々きついところもある。
- ・学年・島で相談する時間が少ない。研究以外にも話し合う時間や教材研究に時間がほしい。
- ・研究授業1回で終わるのではなく、単元などのまとまりで考え、継続して研究していくこと



## (3)努力していること

- ・可能な限り参観している。
- ・授業に向けての実践の方法を学ぶためのアンテナをはるようにしている。
- ・食育は生涯学習なので、子どもたちが学び続けていきたいという意欲が持てるような授業作り、情報発信をしていく。教科領域に沿った食に関する指導を行っている。
- ・部会で話題になったことを実践する。教材・教具の準備。教材開発。
- ・毎週道徳の授業を入れるようにしている。
- ・教科の学習に前向きに関わるような課題の設定
- ・発問のしかたと子どものつづやきをどう活かすか。

## (4)今後の展望

- ・授業を通しての校内研究の継続
- ・まだ引き出しが少ないので、実践を通してできるようになりたい。
- ・子どもの変容を感じ取れるようになりたい。
- ・道徳の授業づくりについて意識して勉強する。いろいろな実践例からクラスの子に合う手立てを考え、行う。使える本・話などを集めて学年部会で共有する。
- ・それぞれが藤小研（市内の教育研究会）や研修などで学んだことを校内で広め、校内研に還元できるような研究にしたい。
- ・秋の校内研に向けて、話し合いを充実させたい。
- ・発問のしかた、板書の工夫、導入の工夫などの研究に取り組んだり、児童支援から考えた授業づくりなども考えていきたい。

## (5)考察 アンケート結果より

異動して間もない教職員から公開授業の参観者の多さに驚く声は毎年聞く。毎年1人1授業公開の負担感は否めない。しかし、けっして楽ではないが、この体制を維持し続けることができていることは、校内研究の取り組みによって、授業力向上に手応えを感じていたり、研究を行うことの大切さを理解していたりすることが記述からうかがえた。

佐藤(2015)でも、同じ学校の同僚からの助言や同一学年もしくは同じ教科の同僚からの助言、校内研究での助言等が教師として成長する契機となっているとの記述がある。

過去2年間関わっているが、どの授業もできる範囲でよく準備をして行っている。特別なものではなく、普段の授業の連続性の中の1つで、その1時間の授業に大成功も大失敗もない。授業者と児童が協同し、授業を作っている印象である。

私自身は、公開授業・協議会に参加して、マイナスの気持ちを持ったことがない。よそよそしかったり、大げさに褒め称えたり、厳しく批判したりというようなところがない。真摯な校内研究への取り組みに敬意を表したいと思っている。

一人ひとりの公開授業から、児童だけでなく、同じ立場で学ぶところはある。また、協議の中で自分が気づくこともあれば、他者から気づかされることもある。そのような互いに学ぶ気持ちや苦労に共感したり、新



しい発見や課題の共有、解決がある取り組みになっている。ともに学び合うことで、個々の力量を高めたり、視野を広げ、指導力が向上する。そして、質の高い授業が可能になるということは、児童の力を伸ばすことにもつながっていく。

これまでも、本校の教職員の同僚性や研修・研究に向かう意識や姿勢が高く、整っていることをしばしば感じてきた。今年は新しい教科の研究に取り組んでいるため、教科の専門性についてはこれから学びを深めていくところである。しかし、研究する教科を変えても、研究体制や取り組みは引き続き安定している。みんなで関わり、築いてきた本校の校内研究の風土はしっかりとしている。

教職員自身が主体的で肯定的な意識で校内研究に向かう中で同僚性を高めていることが一番の本校の強みではないかと思うに至った。

#### 4. 同僚性を育む

校内研究に関して同僚性とは、同僚同士が授業を見合い、それぞれの知識や経験を行き来させながら、相互に授業力を高めていけるような関係やあり方を意味する。また、専門性を高めるためには、同僚と自分の授業をふりかえる作業が必要で、一人ひとりが個々の知識に頼るのではなく、チームで学び合うことが大切とされている。

校内研究の取り組みによって、同僚性を養うと同時に、学年団や連学年で協議することが多くなり、1授業、1教科、1クラスの児童について部会の全員で協力し、話し合い、考え、知恵を出し合う中で、結果的にコミュニケーション力を高めている。

そして、それによって教科指導や授業力のみならず、児童指導・支援体制や学校運営に関わる組織力にも、

校内研究で見られる教職員の同僚性・コミュニケーション力を生かすことができているのではないだろうか。

浜田(2012)は、教師は常に同僚とのコミュニケーションの中で学校運営に携わっており、様々な方向性をもつコミュニケーションを通じて、価値観や基本的前提を互いに見直して動きが生じるような学校内での教師同士のコミュニケーションの必要性を述べている。

#### 5. まとめ

どの学校にも校内研究はある。しかし、その取り組みは、学校によって大きく違っていると思っている。日々の学習指導や児童支援のほうが校内研究よりもウエイトが重く、校内研究は、忙しい毎日の負担にならない程度に進めていく場合が多いのではないだろうか。もちろん、多忙化や働き方改革の点からも過負担となる取り組みでは、継続は難しく、かえって教職員の意欲を減退させてしまう心配もある。

今回、本校の取り組みを振り返ってみると、校内研究の取り組みから教職員の学校運営を支える力が結果として育っていることに気づかされた。まさに人材育成である。教職員の授業力向上、学校運営上の組織力、コミュニケーション力、連携、近年の学校に必要なものばかりである。簡単に力をつけることは難しいが、校内研究の取り組みがカギになりうるという考えを持った。この点からも、校内研究への取り組みを教職員全員で主体的・対話的に進め、資質向上を図り、学校運営全体にその力を生かすことができる学校づくりをしていきたい。

そして、教職員が他校へ異動した折には、本校での経験を生かしたり、参考にしたしたりして、新しい環境で教育活動に取り組めたら、うれしいことだと思う。

また、課題となっている授業参観体制については、自習となり、教室を不在にしてしまうことへの改善策を考えていきたい。不在時の教室の見守りの工夫や他のクラスを下校させて、授業参観に集中する方法もある。校内研究推進委員会で検討していきたいと考えている。

#### <参考資料>

2010年度～2020年度 藤沢市立俣野小学校 校内研究のまとめ

浜田博文(2012)「学校を変える新しい力」小学館

佐藤学(2015)「専門家として教師を育てる」岩波書店